

男爵 大倉財閥2代目総帥(ホテルオークラ創業者)
日本自動車合資会社及び日本自動車倶楽部の創立者

大倉 喜七郎

日本の自動車レースと自動車文化を先駆



大倉喜七郎(おおくら きしちろう)略歴

1882(明治15)年 6月16日東京生まれ(父喜八郎氏の長男)。
1900(明治33)年 学習院予備科、初等学科を経て、慶應義塾幼稚舎、正則中学を経て、イギリスのケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに留学。
1907(明治40)年 7月6日、英国ブルックランズの自動車レースで2等賞に入る。
1910(明治43)年 日本初の自動車団体「日本自動車倶楽部」を結成。
1911(明治44)年 4月、川崎競馬場でマースの飛行機と自動車での競走に勝つ。
1912(大正元)年 「喜七」を「喜七郎」に改名。
1922(大正11)年 以降、父親に代わり帝国ホテル会長に就任。

1924(大正13)年 日本棋院を設立。
1930(昭和5)年 イタリアのローマで開催された「日本美術展覧会」を全面支援、同時代の日本画を海外に紹介。出品作より主な作品を、理事長を務めていた「大倉集古館」に寄贈。
1931(昭和6)年 私財を投じて札幌大倉山ジャンプ競技場の建設。
1936(昭和11)年 川奈ホテルを設立。
1937(昭和12)年 赤倉観光ホテルを設立。
1962(昭和37)年 ホテルオークラを設立。
1963(昭和38)年 2月2日逝去。(享年80歳)
賞歴
1963(昭和38)年 2月5日、従三位勲一等瑞宝章を受章。

日本人最初のレーサー

大倉喜七郎氏(以下喜七郎氏)は、日本自動車レースの先駆者である。父は明治維新の政商で、大倉財閥を築いた大倉喜八郎氏。喜七郎氏は、英国に留学中に自動車を購入し、自ら分解修理なども行った。また、喜七郎氏は1907(明治40)年の7月6日に開催された英国ブルックランズ・グランプリのモンタッグ・レース(参考：2.8マイル〔4.43km〕の楕円形のバンクを有したコース、走行距離は30マイル〔48km〕)にフィアットで出場した。

日本人としてはもちろん初の自動車レース参加であったが、この日のために、喜七郎氏はわざわざイタリアまで行って、1万5000円もするフィアット125馬力車を購入してレースに臨み、欧米の一流ドライバーを相手に快走、メルセデスで優勝したJ. E. ハットンに次いで2位に入賞するという快挙を成し遂げて、並み居る観衆を驚かせ、現地の新聞雑誌に大きく報道された。

この件について、喜七郎氏が「時事新報」紙上で述べている内容を部分的に紹介する。

「自分は当時ケンブリッジ大学にいたが、ある晩学友と世間話をしていたとき、その中のひとりが、日本は確かに日露戦争で欧州人に勝利はしているが、こと自動車競走ではとても対抗できまい、と冷やかされたので、なに自動車競走だってやれば負けやしない、と反発して、ついに出場する羽目になってしまった。そこで、学校の休みを利用してイタリアに出掛け、フィアットを買い、練習かたがたトリノからアルプス山脈のモンセニースの峠を越えてフランスのエッキスラバーンに下り、英国にもって帰ってレースに参加した。いよいよ当日になって、まず色々なレースがあって、それを切り抜けてモンタッグ・レースに参加した。幸運なことに2等賞に入り、4000円の賞金を手にした時には天にも昇るような心地であった。この時の平均時速は92マイル(148キロ)で、自分はそれから97～98マイルまでは出したことがあるが、どうしても100マイルの壁を破ることができなかった。」とある。

1907(明治40)年6月22日発行の写真版ロンドン・ニュースや、7月13日発行の写真雑誌「グラフィック」にはフィアットのハンドルを握っている喜七郎氏の勇姿や、レース出場した時のマスク姿が掲載されている。レース前のロンドン・ニュースには、「日本の紳士であ

り、当時の著名なモータリストである喜七郎氏はフィアット3台を所有しているが、その技量は拔群であるからレースに優勝する可能性は十分にある。喜七郎氏はブルックランズのオープニング記念レースに出場するため、今回特に125馬力のフィアットを購入した」と紹介しているから、喜七郎氏はモンタッグ・レースに出場する前に、英国ではすでにレーサーとしての腕前を評価されていたのである。

また、英国の自動車誌「The AUTOCAR」(1907 July 13th)に、レースの様子が記載されている。

先頭を走っていた3台のうち、米国のスピードキング、デモジェットはタイヤのバーストで落ち、そして、レスタ、ハットンに続き、喜七郎氏は3位に位置していた。しかし、レスタはラップシグナルを誤解して別のラウンドに行ってしまうミスをしてしまった。結果的に、メルセデスのJ.E.ハットンが1位、フィアットの喜七郎氏は2位になった。

このようなレース経過で、喜七郎氏が3位から2位になったことが記載されている。

川崎競馬場でマースの飛行機と自動車での競走に勝つ

喜七郎氏は、また、帰国後に、このフィアットの他にイソッタ・フラスキーニ(伊)、ジゼール(仏)を持ち帰った。

その後、1911(明治44)年5月、喜七郎氏は、川崎競馬場の有料イベントで、喜七郎氏のフィアット・レーサー100馬力と米国人飛行家パット・マース氏の複合機と競走した。

レースの初日は渡辺志骨がハップモビル車で挑戦して敗れ、次いで山口勝蔵がリーガル車で敗れたため、悔しがった日本の自動車ファンは、それでは大倉喜七郎氏のフィアットかイソッタのレーシングカーしか勝てない、というので、喜七郎氏の許可を得てイソッタを持ち出した。

はじめ佐藤武夫が運転し、山中良作が助手を務める予定だったが、夫人と一緒に見物に来ていた喜七郎氏が、場内の雰囲気、俺が運転する、と言い出して佐藤武夫を助手にしてハンドルを握り、見事にマースの飛行機赤鬼号を負かして、観衆の歓呼に応えたのであった。

日本自動車合資会社(輸入販売)設立及び 天皇陛下用自動車のはじめ

大倉喜八郎氏の御書司であった喜七郎氏は、上記ブルックランズ・グランプリのレースの後、帰国後に、「日本自動車合資会社」(輸入販売)を設立して、フィアットをはじめディムラーなどの各種輸入車販売につとめた。日本の自動車界の第一人者として、尽くした功績は大きかった。

また、皇室が自動車採用に積極的となり、陛下の乗用車をはじめ外国からの貴賓接待用に自動車を購入しようという話があったのは1910(明治43)年の末頃であった。外国の貴賓がたびたび訪日するようになり、一時は民間の自動車所有者から借り上げて間に合わせていたが、それでは不自由だし、世界の一等国をもって自認している日本の威信にもかかわる、というので陛下の乗用車をはじめ随員用車まで含めて一度に10台ほど購入することになった。そこで日本自動車合資会社が大きな任務を果たし、社長の喜七郎氏が皇室の車の買い入れに様々な貢献をしたのである。

「日本自動車合資会社」より購入された、ハンバー・ランドレー型は宮内庁に残されている歴代御料車写真帳にある。また、「日本自動車合資会社」でハンバーは1909(明治42)年の警視庁登録自動車36台中最多の7台を占めた。

日本初の自動車団体「日本自動車倶楽部」を創立

もうひとつ、喜七郎氏の功績のひとつには、1910(明治43)年の日本初の自動車団体「日本自動車倶楽部」の設立がある。設立に当たって常務委員長として中心人物となり、1910年12月に帝国ホテルで発会式が行われた。当時のオーナーは外国人が多く、その大半が倶楽部に加入していたうえ、日本人オーナーも主だった人々

はみな加入した。

そのため、自動車業界における有力な団体となり、販売業者、整備業者、関係官庁などは倶楽部の動きを重視するようになる。

例えば、当時は諸外国にならって自動車税の課税基準として馬力数を採用することが決まった。しかし当時の警視庁は各車の馬力を計算することができず、また資料を集めることもできなかった。

そのため、「日本自動車倶楽部」がこの決定権を受け止め、自動車税問題実行委員会をつくって調査に当たり、倶楽部発行の証明書に従って課税馬力を決めたのである。なお、この方式が採用されるまでは自動車と自転車は税金が同額、というおかしな時代であった。

大倉財閥 2 代目総帥として ホテル事業で活躍・屈指の趣味人

喜七郎氏は、帰国後に大倉財閥 2 代目総帥として、ホテル事業においても活躍し、帝国ホテル、川奈ホテル、ホテルオークラ等数多くのホテルの設立や経営に携わり、近代的ホテル経営に先駆的役割を果たした。

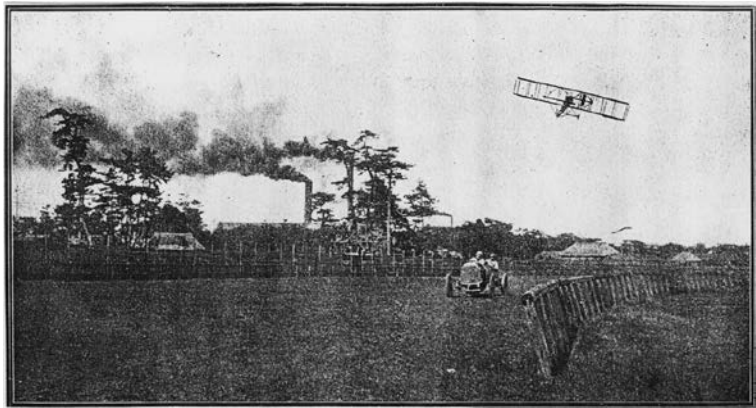
また、屈指の趣味人としても知られ、囲碁、舞踊、ゴルフなどに多彩な才能を発揮し、特に音楽ではオペラ歌手・藤原義江を支援したほか、新邦楽の一種である「大和楽」を創設し、尺八とフルートを合わせた新しい楽器「オークラウロ」を開発するなどした。「バロン・オークラ」と呼ばれ親しまれた。

大倉喜七郎氏は、日本の自動車レースを先駆するのみならず、自動車文化他、多才な先駆者として非常に多くの功績を残した。

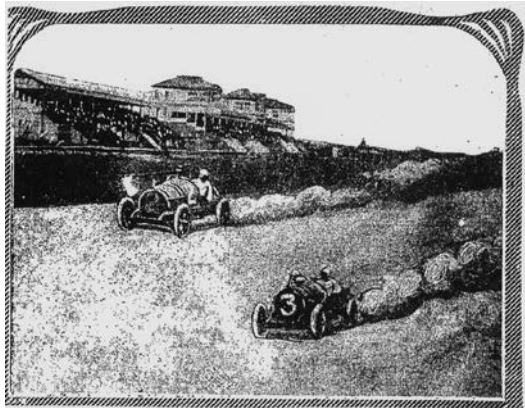
(工学院大学教授 工学博士 野崎博路)



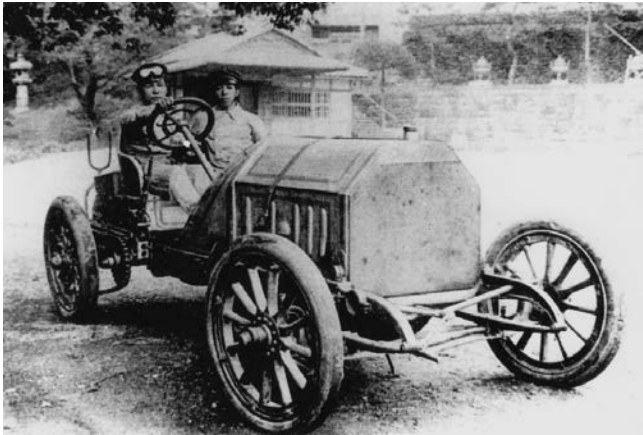
フィアットに乗っている喜七郎氏と、モンタッグ・レースでの競走の光景。



喜七郎氏のフィアット100馬力と米国人バット・マース氏の飛行機の競走、数秒の差で喜七郎氏のフィアットが勝ったと報じられた。1911(明治44)年。



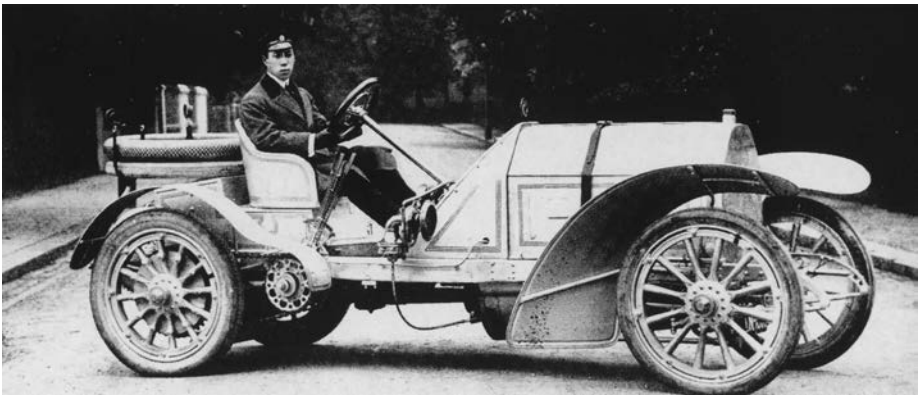
日本で初めての自動車レース、主催は米国日本人自動車研究会。目黒競馬場にて。1915(大正4)年。



喜七郎氏が英国から持ち帰ったフィアット。



運転は喜七郎氏、後方は、右より伊藤博文、有栖川宮威仁親王(1862~1913)、明治41(1908)年夏撮影。



英国ブルックランズ・レース場開催記念レースに、2 位になった喜七郎氏とフィアット。

日本自動車合資会社の陳列場(東京赤坂区溜池30番地)。

